

# エスノステレオタイプの根拠となるもの

西 谷 俊 昭

## I

しかるべき立場の日本人が、相手を鬼畜米英（**Schlagwort**）と呼ばせ、ひたすら、その敵愾心をあおり、大半の国民にとっては、まだ見たこともない、話したこともない人々に関して、それらの負のイメージと、憎しみ・恐怖のイメージをかきたてておき、上陸してくれば、残酷な行為をし、日本全土を蹂躪してしまうと、これまた恐怖を喚起した。そうして、実際に、女子供を田舎に送り、隠したつもりになったのは、**60**年以上も昔のことであった。しかし、占領され、進駐してきた欧米人に接すると、彼らを鬼畜どころか、憧れの国、理想郷に住む、自分たちより上等な人種だと考えて、望ましい、自分たちもそうあるべき存在とみなし、ひたすら、そのあとを追いつつ、自身は卑屈の塊のようになってしまったのも、ほぼ同じ年代の昔のことであった。

占領の実際が、予想よりも過酷ではなく、寛大であったこともあって、まったく一夜にして、相手の評価が正反対なものに変わってしまったのである。

他国や異民族をあしざまに言うのは、戦時中の日本人にのみ見られる特殊事例ではない。太古の昔からのならいである。隣接する民族を、その自らにとっては異質に思える特徴を言い立てる名称、あるいは蔑称で言い表そうとする。その嚆矢ともおもえるのは、全方位の異民族に言及した例：東夷、南蛮、西戎、北狄、そして（自らをすぐれたものとし、諸判断の基準とする）中華（思想）という名称である。日本語でも都人が東国の男を、「あずまえびす」とのしるのも、その世界観の一端をはしなくも取り入れたものである。

異民族との接触に関しては、**Tacitus** の“**Germania**”が他民族との接触

を、比較的冷静に、即物的に記述している。その内容区分は巧みである：居住境界、住民の由来、その性質・特徴、生産物、ゲルマン人の公的及び私的生活、宗教、集会、法律などを述べ、南、西の境界にすむ民族を扱うと思えば、西および北の民族を記述し、ついには東方に住む **Sueben** 族にも言及するなど、要を得た簡潔な描写である。

接触が戦争という形態をとるのは歴史のならいである：フェニキア人の西侵、バルシャとギリシャの戦い、フン族のヨーロッパ侵入、サラセンのヨーロッパ侵攻、モンゴルの大侵攻、オスマントルコの脅威、等等。

これらがヨーロッパ人にとって、一般にオリエントないしアジアに関するイメージを形成させる大要因となったことは否めない。

近くは「黄禍論」<sup>(1)</sup> (**Gelbe Gefahr**) が記憶に新しいが、これは歴史的回想の上に築かれた幻影というべきものである。その論者（我々にはドイツのヴィルヘルム 2 世が著名であるが、彼だけに黄禍論を帰せられない）がそれらの歴史的素材を任意にその論旨の中に織り込み、聞く人の心を悪夢的幻想の中に誘い込む材料として活用したのであった。

政治的意図から発せられた主張ではあったが、一般民衆に対する文化的影響は計り知れないものであったと思われる。明治 28 年ころに拮がりを見せたこのアジテーションは、21 世紀になっても、アジアからの経済的進出を目の当たりにすれば、即刻、**Gelbe Gefahr** という語が、経済状況を報ずるのに使われるほど、潜在的な効果を依然としてもっている。

集団の範囲を大規模にし、アジア対ヨーロッパ、白人種対有色人種などの対比を持ち出し、人種の優劣を競うようになったのは、進化論、遺伝学、人類学の成果を短絡的に敷衍しようとしたものに他ならないが、援用する側は都合のよい部分を扇情的に利用するので、その社会・文化に他民族に関する思考の基本形、枠組みを情緒的に形成させるのには好都合である。

## II

事柄をヨーロッパに限定しても、スペイン人、フランス人、トルコ人、…をどのような人（民族）と思うか？というような、相互の心の中のイメージを探ろうとするのは、稀な試みではない、むしろ好まれる題材でもある。自画像は心の中に誰でももっているが、自身の他人の心中における鏡像こそ興味の対象になるのである。自分自身を或るエスニック集団に帰属する一成員とみると、集団の特徴を自己判断で数え上げてイメージを描こうとする：

ドイツ人の自画像的な集団的自己表現を求めると、次のような語句があげられるとされる：

**Lederhose, Dirndl, Gemütlichkeit, Pflichtbewusstsein, Ehrgeiz, Pünktlichkeit, Genauigkeit, Zuverlässigkeit, Umgänglichkeit, Geselligkeit**  
(統計的な精確さは望めないが、「ステレオタイプ」に言及した記事では、かなりの頻度で出現する)。

**Ethnostereotypen** とされる **Kartoffelfresser, Krauts, Wurstfresser** は自らの省察には出現しない。

国民、民族というのは空想の産物、フィクションであるという考え方に現時点では全面的には賛意を呈せないが、国民、民族への帰属意識は多分に情動的、情緒的な要素で満たされているように思われる。

ドイツ語におけるドイツ人の自画像では、啓蒙時代以降の、社会を構築、発展させていくうえで求められた気質、精神態度がハイライトされて、それが強調され求められるなかで、産業に変革がもたらされ、近代工業の萌芽期が訪れ、それを支える人間には規律、進歩発展思考、改良の努力が求められたことが反映され、徐々に、現実存在することが望ましい資質として、人々の心の中に定着していったのではないかとも思われる。

### III

**Was ist typisch deutsch?**「典型的なドイツ人とは？」と問うならば：

次に示すのは、「もしあなたがドイツとドイツ人のことを考えるとしたら、ドイツとドイツ人を表すものとして何と結びつけますか？」という設問に対する返答をパーセントで表示したものである。（ドイツでの値 **vs.** ドイツ抜きで、ヨーロッパ人の平均値）

**Fleißig und pflichtbewusst** (23,0 : 4,3) ;

**Ordnung, gut organisiert, pedantisch, genau, akribisch, akkurat**  
(13,1 : 9,8) ;

**Pünktlich** (13,1 : 2,6) ;

**Ordnungsliebend, sauber** (12,3 : 3,9) ;

**Wirtschaftliche Probleme, Arbeitslosigkeit** (11,5 : 0,4) ;

**Bier** (1,0 : 5,0) ;

**Hitler, Nazis** (0,7 : 3,1) ;

**Krieg** (0,2 : 8,8)

(FOCUS-Online 31. 05. 2006 による)

ドイツ人とドイツ人以外のヨーロッパ人の判断にかなりの齟齬がみられることにより、先にあげたステレオタイプが、自身が望ましいと思う到達値を表現したのでは、との解釈も成り立つ。

### IV

#### Steiermark の Völkertafel<sup>(2)</sup>

**Völkertafel (VT)** はヨーロッパの諸民族がお互いに対して作成した **Bilder** (影像) がいかにしてできあがってきたかを考える具象的なチャンスを与えてくれる。

およそ 1700 年ころのヨーロッパ人に対する世論調査のアンケート結果とも考えることができるが、国民・民族の自意識とヨーロッパにおける他国民・他民族への偏見、先入見の生成を理解するための、またとない歴史的ドキュメントとも考えられる。ただし、**Leopold-Stich (LS)** という 1718 年に作製されたとみられる銅版画が、内容、意匠ともに、その源泉とみなされるようである。

**Völkertafel** は油彩の絵画 (104×126 cm) である。「ヨーロッパに住む民族とその特徴の簡単な描写」(**Kurze Beschreibung der In Europa Befintlichen Völkern Und Ihren Aigenschafften**) という表題をもつ。いくつかの同時代の版がのこっているが、それは、その成立期にして既に人気を博し、よく知られたものであったことをうかがわしめる。鑑賞、装飾目的の製作ではない。おそらく宿泊施設のフロントの壁にでも掛けられ、諸国の旅人に関する情報・知識を提供したものであろう。

**VT** は、ノアの三人の息子を祖とする子孫として、旧約聖書で数えられる 72 の民族を一覧に供した表を指すこともあり、また、地理学的、民族学的な関心から、諸民族の系統を記述したものを **VT** と称することもある。通常は、**VT** は民族系統図の意で使用されるのが一般的であり、**Die sogenannte fränkische Völkertafel** (J. Friedrich, 1910 München) あるいは、**Über die germanische Völkertafel des Ptolemaeus**. (Georg Holz, 1894 Halle a. S.) などは、その例である。

**Steiermark** の **VT** は 10 の民族を、17 のカテゴリーにおいて、ほとんど一語の評言で、その民族の特徴とみなされるものを示したものである。

そのカテゴリーは：1. 精神態度，2. 性質・性向，3. 理性，4. 性質の評価，5. 知識 6. 衣装，7. 癖，8. 好み 9. 病気，10. 国土，11. 戦いにおける態度，12. 信仰，13. 政体，14. 豊富にあるもの，15. 時間の過ごし方，16. 動物に例えれば，17. 人生をどう終えるか，

10 の民族は：スペイン人，フランス人，**Welsch** で括られるロマンス語系民族（イタリアとみてよいか？），ドイツ人，イギリス人，スウェーデン人，ポーラ

ンド人、ハンガリー人、ロシア人、トルコあるいはギリシャ人が、この順序で左から右に配置されている。列の最上に位置する欄には、その民族の典型的な服装・容貌を視覚化して強調しようとするのか、彩色された絵が並べられている。

左から7番目のポーランド、すなわち **BOLÄCK (POLACK)** という項目から右へは、今まで、価値判断がポジティブ・ネガティブという明確な対比では測りにくい評価語であったものが、以後の各民族を描写する語句には評価値が含まれ、その価値は下降する傾向（ネガティブな判断語の使用）を見せる。この傾向は絵の中で、いちばん右に配置されている列まで続く。つまり、**Ethno-stereotyp** の評価値的な要素は左肩上がりで上昇するのである。

民族の名称表示に使われている **Bolack (Polack)**, **Boläck** 自体が、すでに貶称に属するものなのである。すなわち、**Polen** あるいは **Pohlen** がラテン語に由来する **Polonia** のドイツ語形で、通常の名称であるが、貶めた見方をしたり、やや、さげすむような色合いをもたせる時には、**Bolack (Polack)** が使われる。

これは、スラブ系の言葉の語尾 - **ak** (この **Pol-ack**, あるいは **Böhm-ack** ボヘミア人など) で語を拡張させることにより、揶揄したニュアンスを持たせたもの。**wulacken (wullachen)** は **schwer arbeiten** の意味であるが、**wühlen** (掘る) を擬似スラブ語化したものが、ポーランドの鉱山労働者、農業労働者の移動に伴い、東プロイセンからルール地方、ザール地方の工業地帯に広がったものだと言われている。ポーランド以外の民族には通常レベルの名称を使用し、ポーランド人には貶称を用いたことにより、すでに、絵の作成者の **Ethno-stereotyp** が歴然としている。これは彼（彼ら）の個人的な悪意の表明ではなく、「頭の中に持つ（形）像」により思考が拘束されているからである。

**Polack** に関連しては次のような表現が **Wander** に集録されている：

**Ein Polack ohne Läuse, ein Feld ohne Mäuse, ein Krieger ohne Klinge  
sind drei seltene Dinge.**

**Der Pulacke schläd'n (schlägt ihn) doch immer ei a Nacken.**

**Polack, wo is dein Ohr.**

VT では、スペイン人が「高慢」、フランス人が「軽薄」と精神態度を評されているのに対し、ポーランド人は「粗野」とされ、性質は「まだ、荒っぽく」、知性を「あまり尊重しない」、「凡庸な」性格、「いろいろな言葉で」物事を知り、「丈ながの上着を」着用し、「貴族」を好み、「下痢」にかかりやすく、国土は「森におおわれており」、戦（いくさ）は「形容しがたい、並外れの」戦いをし、「なんでもかんでも信仰し」「選ばれたものを主君に戴き」「暇があれば喧嘩をし」「獣に例えれば熊」「家畜小屋で死ぬ」といったポーランド像が描かれる。

ちなみに、VT では、ドイツ人は、浪費家であり、酒を好み、国土は肥沃で、戦は無敵、敬虔な信仰、暇さえあれば酒を飲み、獣に例えれば獅子、ワインの中で死ぬとされている。

## V

生涯に二度しかイングランドの外に出たことのない女性（1802-†1878）が数百冊にのぼる書物を情報源として、偏見に満ちた地誌を書いた。**THE CLUMSIEST PEOPLE IN EUROPE: Or Mrs. Mortimer's Bad-Tempered Guide to The Victorian World by Todd Pruzan**（『不機嫌な世界地誌』三辺律子訳 2007 年 バジリコ）である。

これは、いわば、国民性らしきものを比較対照することにより諸国をランク付ける架空の旅行記である。

総計 59 にのぼる国や地方が、当時欧州に流布した地理学的、人類学的、歴史学的知識を基本にし、自身の偏狭な世界観になんら修正を加えずに、人種観、民族観を集積、敷衍して記述されている。もちろん、アジアの部には日本も言及されているが、これに関しては鎖国時代の影響もあり、情報が少なく、

少数の来訪者が持ち帰った知見を踏襲して述べている。しかし、その内容は当代としては、まじめな文献から得たものであることが推定できる。

ヨーロッパに関しては、**24**の国、地方、民族がとりあげられているが、ここでは、ポーランドに関する記述に注目してみよう：

**1830**年～**50**年にかけて、革命や反乱がロシアによって鎮圧され、その支配下で、抑圧状態にあったことが編者（**T. Pruzan**）の前書きで知らされた後、ポーランドの記述が始まる：

プロイセンとの対比がなされ、子供たちの服装がみじめで、パンを求めて馬車の後を追う生活風景の惨めさがまず示される。ポーランドが三国の分割で、他国によって支配されている政治的な不幸が同情的に述べられる。粗末な家、生活程度の低さに言及される。

国の風景が荒涼とし、旅人に憩いをもたさぬこと、食物がジャガイモ、キャベツ、大麦などの粗末なものであり、そのかわり、お決まりのように、「無類の酒好き」という言葉で、民族の負の特性を暗示する伏線が敷かれる。

ポーランドに言及しておりながら、そこに住むユダヤ人の生活状態をやや詳しく述べ、「ユダヤ人はポーランド人のように怠け者でなく」という対比をすることによって、ポーランド人に決定的な評価を下す。

「いばりくさったポーランド人」（これは「誇りたかき」、「高慢な」くらいの訳語の方が適切と思われるが）という **Klischee** を持ち出すことにより、ポーランドには支配階級と貧乏な農民という構造があり、流通の世界はユダヤ人、ドイツ人が牛耳り、ポーランドの支配階級は労働などにあずからぬのだという描写がなされる。

こうした識字階級がもちうる知識、社会認識、民族観は決して、この女性にのみ限定されうる特殊なものではなかったと思われる。階層を超えて社会構成員全般に広がった符牒のようなものではなかったか。



## VI

ことわざ、決まり文句というものは、ただ単に、表現を簡潔に適切に行うための修辭的補助手段ではない。これらは言葉を発する者、受容する者、双方に鮮やかな心像を喚起するし、思考に対して拘束力を行使する、ステレオタイプの役割を演ずる。

ここで、ポーランドあるいはポーランド人を主題とする慣用語句を当代の蒐集から選んでみよう<sup>(3)</sup>：

**Der Pole ist ein Dieb, der Preuß ein Verräter, der Böhme ein Ketzer  
und der Schwab ein Schwätzer.**

**Stereotyp**：～とくれば…の形式。ステレオタイプの典型。

**Polnische Brücke, böhmischer Mönch, schwäbische Nonne, welsche  
Andacht und der Deutschen Fasten gelten eine Bohne.**

いずれも価値のないもの、考えられない不可能な事柄

**Der Pole würde eher am Sonntag ein Pferd stehlen als am Freitag  
Milch oder Butter essen.** 貧しい人でも牛を飼っているので牛乳は飲めるので。

**Polen ist der Bauern Hölle, der Juden Paradies, der Bürger Fege-  
feuer, der Edelleute Himmel und der Fremden Goldgrube.**

ポーランドと言えば…の形式。農民の窮状、ユダヤ人が迫害されない土地、市民階級が育たない国、貴族階級がしたい放題、外国人の稼ぎ場所（三国に分割統治されて）などポーランドの置かれている状況。

**Wie ein polnischer Stiefel, an beide Füße gerecht.**

巧みな，器用なさま（？）。「ポーランドの長靴のように」という強調形式のひとつであるが，ポーランドの事物の奇異さに注目させることによって，裏にからかいの意味を感じさせる。

**Es geht zu wie auf dem polnischen Reichstag.**

混乱状態。

(以上 aus Karl Simrock : Die deutschen Sprichwörter 1846)

**Noch ist Polen nicht verloren.**

まだ救いはある，まだ可能性は残されているの意。望み無きにしても非ず。

Joseph Wybicki が 1797 年に作詞した **Dombrowski-Marsch** の冒頭の句である。これは 1794 年 10 月 10 日の敗戦に際し，将軍が発したとされる **Finis Poloniae** (**Das Ende Polens**) という言葉にポーランド人が応えるかたちをとっている。

**Jetzt ist Polen offen.**

大きな興奮；何事も可能，何をしてもかまわないと思われるような状況にあること，お構いなし，無礼講

この慣用句は，**Polnische Wirtschaft**=**grosses Durcheinander** というメタファ，および，国民国家再生を目指した多くの反乱に由来するとされている。

**Polen ist in Not.**

もう逃げ道がない，なすすべを知らない。**Holland in Not** との取り違えともいわれる。

**Eine polnische Wirtschaft**

大きな(財政上の、物質的な)混乱。**Jean Gilbert (1910)**, **Ernst Ortlepp (1831)**, **Friedrich Hebbel (1853)**, **Marie von Roskowska (1863)**らの、作品の表題・題材にも使用されていることでも、社会における認知度がわかる。

自然研究者でもあり作家でもあった, **Joh. Georg Forster (1754–1794)** が手紙で **1785 年 1 月 24 日** に初めて使用した概念とされる。この **Schlagwort** を彼が作品の中に取り入れたことにより、広く概念世界に流布することとなったが、最も頻繁にドイツ-ポーランド関係に出現し、両国の関係に重くのしかかる語となった。

### **Sich polnisch verabschieden**

挨拶をせずに、こっそり立ち去ること。日本では「フランス式」「フランス風」という方が普通。

### **Sich polnisch verheiraten**

#### **Polnisch zusammenleben**

野合

### **Hochgeschoren sein**

刈り上げている。髪の毛を短く切っているポーランド人に対する軽蔑的表現。

## **VII**

**Wander** には：

**Den Polen hintergeht der Deutsche, den Deutschen der Welsche, den Welschen der Spanier, den Spanier der Jude, den Juden aber blos der Teufel. Sagen die Polen.**

Der Pol' an Einem Tag oft mehr vertrinkt, als was ein Deutscher im Leben erringt.

Der Pol vnnd Böhm haben einander lieb ; kompt datzu ein Vnger, so sinds drey rechte Dieb.

Der Pole ist ein Dieb, der Prüss ein Verträther seines Herrn, der Böhme ein Ketzer, der Swab ein Schwätzer.

Der Pole wird (nur) durch Schaden klug (wenn er es wird).

Polen und Deutsche werden nie Brüder werden.

Wenn der Pole Italiener, der Mazure Weltmann der Ruthene Pole wird, verfällt er dem Teufel.

Wo drei Polen beisammen sind, hört man fünf Meinungen.

Wo zwei Polen, da sind drei Parteien.

Einem Polen soll man leihen, einen Deutschen soll man freien.

In Polen haben die Klöster ihre Weide.

In Polen hängt immer einen Juden und einen Esel zusammen.

In Polen ist nicht viel zu holen.

In Polen ist nichts zu holen als dürre Backen und zerrissene Jacken.

In Polen wird's nict besser werden, dhe es nicht recht schlecht geht.

Polen ist der Bauern Hölle, der Juden Paradeiss, der Bürger Fegefeuer, der Edel Leute Himmel und der Frembdlinger Geld Grube.

Polen bat drei Statthalter : einen auf Reisen, einen in Warschau und einen auf Reisen.

Polen hat ein Ministerium mit vier Ohne : einen Aufklärungsministerohne Schulen, eine Cultusministerohne Kirchen, einen Justizminister ohne Rechtspflege und einen Schatzministerohne Finanzen.

Polen ist katholisch.

Polen ist über, und Warschau brennt. Polen kennt sein viertes Regiment.

Polen sthet, wenn's auch drunter und drüber geht.

Polen wird durch Verwirrung regiert.

Da steht Polen auf.

Nun ist Polen offen.

Das martialische Polen, das wachsame Preussen, das witzige Nieder-

land, das reiche Flandern, das niedliche Englamd, das veirliebte Frankreich, das herzhaftes Schweizerland, das listige Savoyen, das verschmitzte Italien.

In Polen ist alles krümm, nor die Trepp is gleich.

In Polen und Litauen sind viel böse Brücken zu schauen.

So leicht gibt Polen sich nicht verloren.

Wenn Polen und Litauen wird vereinigt werden, will ich mich hängen lassen.

Der Henker Polens.

Das Stereotyp des Deutschen : Lederhosen Dirndl Gemütlichkeit, Pflichtbewusstsein, Ehrgeiz, Pünktlichkeit, Genauigkeit

Gut organisiert, akkurat, leicht pedantisch

Polensitte に関しては、(スラブ系の人々に共通の) 客を歓待する、もてなしの心はことわざともなっている。

Nach alter Polensitte herrscht Gastrecht in jeder Hütte.

Polensitt' verschliesst die Zhür nit.

## VIII

“Polnische Wirtschaft” は、場合によっては、ステレオタイプとも、先入

見とも、あるいは、敵対像とも見ることができる。この言葉の誕生は、ポーランド国家の決定的な没落、経済的な不況、社会的な停滞、国民の大変な貧困状況、貴族たちの浪費癖があからさまになった時期に当たっている。先に述べた **Forster** の手紙に発するこの言葉は、後期封建主義の、変化を余儀なくされた世界への啓蒙を目指し、不正なる世界を変えるための倫理的な要請として、贅沢三昧な行動、ポーランドの不潔な環境に対する道義的な憤慨を呼び起こすために一再ならず提示された。

**Zedler, J. C. Adelung, Joachim Campe** らの *Wirtschaft* の定義、**Forster** の手紙、日記などから遡ると、*Polnische Wirtschaft* は **unordentlicher, unsauberer Zustand, ineffektives, verschwendersches Verhalten** と概念をまとめることができる。(S. 516 in: 100 Schlüsselbegriffe)

時代とともにこのステレオタイプが一般化するのには、**Heinrich Laube, Friedrich Hebbel, Gustav Droysen** らが、人口に膾炙し、諺のように使用されることに言及していることで示される。(S. 516 in: 100 Schlüsselbegriffe)

**Meyer** の啓蒙的な百科事典<sup>(4)</sup>は 1850 年にすでに、**Forster** を引き合いに出し、*Polnische Wirtschaft* を項目化している。

*Polnische Wirtschaft* は **der polnische Reichstag** という言い回しがなかったなら、これほどの勢力拡大は見せなかっただろうといわれる。前者が日常の体験を基盤にするのに対し、後者は、外交官、政治家、歴史記述の知識に由来し、「決して結論に達しない、混乱に終始する集会の典型」を意味する。

市民的・前期資本主義の需要というシステムにおいては、「勤勉」は卓越したポジティブな評価語であって、*Polnische Wirtschaft* に対置されたのであった。(たまたま、当時の状況に沈潜していた「ポーランドのだらしない *Wirtschaft*」に対し、ドイツ人の「**Ordnung, Fleiß und Sparsamkeit** という無敵の有能さ」が対極に、得意げに、たまたまドイツがその局面では先行したにすぎないのに、まるで天稟かのように置かれたのであった。)

上昇気流に乗った *Polnische Wirtschaft* という語は：das Wörterbuch der

altmärkisch-plattdeutschen Mundart, das Wörterbuch der Leipziger Mundart, das Preußische Wörterbuch, das Schlesische Wörterbuch, die Mausfelder Mundart, der Thüringer Sprachschatz<sup>(5)</sup>といった方言辞書にも、続々と登録されていった。

俚諺辞書、諺慣用句辞典も19世紀から世紀末にかけて、この語の流布と用法を映し出していった。

Daniel Sanders, das Langenscheidt-Wörterbuch それに Karl Friedrich Wilhelm Wander の浩瀚なことわざ辞典も後れを取りはしない。(Wander : Es ist eine polnische Wirtschaft. Unordentlich, unsauber)

19世紀末の諺・慣用句辞典はますます教養市民階層の知識を主導してゆく。

Karl Simrock も “es geht zu wie auf einem polnischen Reichstag” を収録し、グリムの辞書も Reichstag の見出しのもとに, sprichwörtlich, bild der unordnung und zerfahrenheit war der polnische reichstag と記述する。Meyer, Brockhaus, Pierer などの百科事典も項目を立てる。

啓蒙期以来, polnische Wirtschaft を、自身とその生活を有効に組み立てられないポーランドの意に解していたが、ヴィルヘルムの対ポーランド政策が進むにつれて, Stereotyp は, Feindbild とはいわないものの, Vorurteil となってゆく。ヒトラーもポーランド侵攻の口実に、疲弊したポーランドの自助力の欠如を持ち出したのであった。

現代の辞書も polnische Wirtschaft という慣用句の伝播を承認している。Trübners Deutsches Wörterbuch しかり, Heinz Küppers Wörterbuch der deutschen Umgangssprache も、版により若干の修正を加えているが、歴史的記録にとどめる努力をしながら、「大変な無秩序、言い表せないくらいの混乱、プロシャの兵士がワルシャワおよびその周辺で遭遇した」としている。ネガティブな内包は払拭できないが、この辞書だけを参照する者にはステレオタイプがどこに存するのか分からない。polnische Wirtschaft 以外の, Polen およびその関連語句を含む、あまたの諺、慣用句を時代を遡って精査することに



よっておぼろげな輪郭をつかむしかない。

## IX

特定のエスノステレオタイプが負のイメージを強力に喚起し続けるならば、それは二つの国、民族の間に良好な関係を築くことを非常に難しくしてしまう。ドイツとポーランドの間には、時には **Erbfeind**（宿敵、不倶戴天の敵）という厳しい言葉が飛び交うことが繰り返し起こる。

（たとえば、**Das polnische Bild vom „deutschen Erbfeind“** という政治欄の見出し。 **Süddeutsche Zeitung Nr. 190 20. 08. 2007**）

なぜこのように何世紀にも亘ってエスノステレオタイプが存続するのであるうか。ステレオタイプを「長期に亘る牢獄」と呼んだのは **Fernand Braudel** であるが、外国の国民、文化に対して、縛り付けられて固定されたように下す判断、先入見は、自らの観察、経験によって得られたものではなく、何世代にも亘って伝承せられたものである。ステレオタイプ自体は必ずしもネガティブなものばかりではなく、スペイン人が **temperamentvoll**、フランス人が **lebensfreudig** といわれ、ドイツ人がいつも **effektiv und arbeitsam** といわれるわけでもない。

ところが、**Wolfgang Wippermann** によると、ドイツ人、ポーランド人の心像に関しては、何かしら重く押し掛かってくるものがあるのだという。つまり、**Geostereotypen** と呼ばれるものの存在があるという。

ドイツ人にとって、ポーランドは東なのであり、しかも、この東はドイツにおいては、いつも西、北、南とは、違った意味をもっていたのである。西は **Geostereotyp** として、退廃、デカダンのメタファ、南は怠惰のメタファ、北は清浄のメタファであるのに対し、東は後進性や悪のメタファだという。

東という悪は、冷たい、粗野で恐怖を生ぜしめる空間であって、そこからは未開の民族が西に流れ込んでくる。

この **Geostereotyp** は今日でも、ドイツ人の他国に対する好悪を測る尺度に

記入されており、その順序は、スウェーデン、フランス……チェコ、ポーランド、ロシアとなり、ポーランドは、かろうじて最後尾のロシアの前に位置する。

逆に、ポーランドには、(ドイツは)「東に迫ってくる」という **Stereotyp** が存続し、学校では、どの生徒でもドイツ語でこの **Stereotyp** が綴れるといわれるくらい決まり切った概念である。

**Stereotyp** の記述は一筋縄では行かぬようである。

#### 注

- (1) 橋川『黄禍物語』, Heinz Gollwitzer『黄禍論とは何か』(瀬野文教訳)に偏見の裏の屈折した心理が詳しい。
- (2) 従来のステレオタイプ研究が、個々人の性格タイプ、行動タイプが **Ethnisierung, Nationarisierung** される過程をあまり問題にしなかった。**Stanzel** らが初めて **Imagologie** の立場から取り上げた。**Steiermark** は発見された場所を示すが、絵は **anonym** である。
- (3) 出典はすべて文献にあげた, **Röhrich, Küpper, Simrock, Wander** から。
- (4) 百科事典, 言語辞書, 旅行記などとステレオタイプの関係を述べたものは実証的には少ない。
- (5) 方言辞典に関しては, „100 Schlüsselbegriffe“ S.518 から。

#### 文献

- Adelung, J. C. : Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart. Berlin 2001 (1793–1801)
- Aschmann, B./Salewski, M. (hrsg) : Das Bild des Anderen. Stuttgart 2000
- Brandt, Marion : „Polnische Freiheitsliebe“ Anmerkungen zur Geschichte einer stereotypen Polenwahrnehmung. In : Germanistisches Jahrbuch Polen Convivium 2002
- Czaopicki, A./Ehmig, S./Kiewitz, C. : Bilder in unseren Köpfen. Die Vorstellungen der Deutschen von Polen. In : Convivium 1995
- Grimm, J. u. W. : Deutsches Wörterbuch. elektronische Ausgabe der Erstbearbeitung. Der digitale Grimm. Zweitausendeins 2004
- 橋川文三 : 『黄禍物語』 岩波現代文庫 学術 24 2000 年
- Jäger-Dabek, Brigitte : Polen. Eine Nachbarschaftskunde für Deutsche. Berlin 2003

- Kobylińska, Ewa u. A. : Deutsche und Polen. 100 Schlüsselbegriffe. München 1993
- Küpper, H. : Wörterbuch der deutschen Umgangssprache. Berlin 1987
- Lawaty, A./Orlowski, H. : Deutsche und Polen. München 2003
- Rada, Uwe : Zwischenland. Europäische Geschichte aus dem deutsch-polnischen Gebiet. Berlin-Brandenburg 2004
- Röhrich, L. : Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten. Berlin 1974
- Sanders, D. : Wörterbuch der deutschen Sprache. (Nachdruck Tokyo 1968)
- Simrock, Karl : Die deutschen Sprichwörter. Stuttgart 1988 (1846)
- Stanzel, Franz K. : Europäer. Ein imagologischer Essay. Heidelberg 1998
- Stanzel, Franz K. (hrsg) : Europäischer Völkerspigel. Heidelberg 1999
- Tacitus : Germania Lateinisch/Deutsch 1972 Reclam
- Trübners Deutsches Wörterbuch. Berlin 1939–57
- Wander, K. F. W. : Deutsches Sprichwörter-Lexikon. Berlin 2001 (1867–1880)
- von Zitzewitz, Hasso : Das deutsche Polenbild in der Geschichte. Köln 1992